



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」131号
Issue Date	2009-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66257
Type	journal
File Information	yuin131.pdf





拾 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

目 次

図書館今昔	附属図書館貴重資料室紹介 (コラム) ……………20
附属図書館事務部長 五十嵐 哲郎…………… 1	教員著作寄贈図書・学術成果コレクション (HUSCAP)
お知らせ	寄贈文献(平成20年10月16日～平成21年2月10日)
・来館日誌(平成20年11月～平成21年2月) …… 9	……………23
・海外出張報告会を開催しました……………10	会議(平成20年11月15日～平成21年3月18日) ……24
海外出張報告	各委員会等委員変更について……………26
学術情報流通の現在—ドイツ, 英国出張報告	図書館日誌(平成20年11月～平成21年2月) ……27
附属図書館情報システム課 杉田 茂樹……………11	
The SPARC Digital Repositories Meeting 2008	
への参加とカナダ訪問	
附属図書館情報システム課 野中 雄司……………14	
カリフォルニア大学を訪問して	
附属図書館情報サービス課 東 朋子	
附属図書館情報システム課 城 恭子 ……17	

図書館今昔

附属図書館事務部長 五十嵐 哲郎

1. はじめに

「大切なことは、大学図書館が、学内の閉鎖性を打破し、大学の共有財産である図書が、学問に志す者のすべてに開放され、利用されるのに役立つことである。また、学問の相互交流、相互協力の媒体となって、ひろく学術の発達に貢献することである。ひと言で言えば、“開かれた大学図書館”というのが、その未来像を支える理念であるだろう」

1970年10月、高野山大学で国立大学図書館協議会総会が開催された。冒頭の一節は、「大学図書館の未来像—その理念を中心に—」と題する“新しい大学図書館像”特別委員会報告の結びに記された文章です。この報告は、北大附属図書館の今村館長により作成されたものでした。

総会の開かれた1970年、全国の大学においてこれまでの大学のあり方について深刻な反省がなされ、大学改革の気運が高まっていた。同年

11月、北大では「北海道大学改革検討委員会」が設置され、図書館に関することを分担する専門委員会の最終報告が1973年7月にまとめられた。

この最終報告は、図書館の改善に関する諸方を提示することにより、図書館の改善に資する意見の提出を期待したもので、後半部分において、特に重要と認められる4つの問題を取り上げて個別的に論じた。

- ① 学術情報サービス
- ② 相互利用
- ③ 図書館業務の機械化
- ④ 図書館職員

主にこの4つの問題に焦点を置き、当時と現在の図書館を比べてみました。

2. 4つの問題

2. 1 学術情報サービス

昔 収書速報、雑誌記事索引など速報的なもの、和・洋雑誌目録、参考図書目録、特殊文献目録などの文献目録を印刷の上、研究者に対する学術情報資料を提供することや、利用者の依頼による文献等の調査を行うことが、教官、学生に対する学術情報サービスとして求められていた。

また、学生に対しては、「学生に対する図書及び図書館の利用指導を、教養部時代に組織的に実施すること」と指摘している。

今 収書速報、雑誌記事索引などの2次資料は、データベース化が進み、順次利用可能なものを増やしてきました。利用の形態も、冊子からCD-ROMに変わり、更に、ネットワークを介したオンラインでの検索が主流を占めるようになりました。

特に、2003年度からは、学術文献データベースと電子ジャーナルをあわせ、教育・研究に欠かすことのできない基盤的な学術情報の共同利用体制の整備を図りました。

表1は、全学で共同して利用するために、特定経費で選定している学術文献データベースで、年間71万件に及ぶ検索が行われています。表2は、同じく電子ジャーナルで年間210万件に及ぶ論文へのアクセスがあり、どちらも本学の教育・研究の維持に欠かすことの出来ない学術情報の基盤となっています。（電子ジャーナルに関しては、榆蔭2008年3月号に「北海道大学の電子ジャーナルの現状」と題して鶴澤係長が寄稿）

学生に対する図書及び図書館の利用指導については、入学後間もない時期にオリエンテーションを実施していましたが、2001年度からは「情報探索入門」と題して、基本的な学術文献への接し方を一般教育演習の講義の一コマを使い、図書館職員が説明することを始めました。榆蔭2008年7月号に「図書館情報を使う力の養成について」と題し平田、横井両係長が報告しているとおり、まだ新入生全員の受講にまでは至っていません（2008年度受講生884名）。

「学士課程教育の構築に向けて（答申）」においても、初年次における教育上の配慮として「図書館の利用・文献検索の方法」が重視されていると指摘されています。2009年度からは、名称を「図書館情報入門」と改め、体系的な情報リテラシー教育支援の充実、拡大を目指しています。

2. 2 相互利用

昔 他部局の図書（特に雑誌）の利用について、形式的には、相互利用は支障なく行われているということが出来るが、実質は、必ずしもそうではないとの認識の下に、図書集中管理の必要を指摘し、その他改善すべき点として、次の3点を掲げた。

- ① 全学共通の“図書相互利用規程”を定めること
- ② 図書相互利用のしおりを作成すること

表 1 : 学術文献データベース (2009年度)

No.	データベース名	2007年 検索回数	同 時 アクセス数
1	ABSEES	1,116	無制限
2	ASFA	31,659	無制限
3	Biological Abstracts	9,394	10
4	Book Review Digest	170	1
5	CAB Abstracts	637	1
6	Calcium and Calcified Tissue Abstracts	548	無制限
7	Ceramic Abstracts / World Ceramics Abstracts	349	無制限
8	CINAHL	2,683	1
9	CrossFire Beilstein / Gmelin	No. 12より分離	無制限
10	Current Contents	19,443	無制限
11	DII : Derwent Innovations Index	1,015	無制限
12	Discovery Gate	8,065	無制限
13	EconLit	2,768	4
14	Global Books in Print	424	1
15	Global Health	No. 5 に含む	1
16	Humanities Abstracts	982	1
17	Index to Foreign Legal Periodicals	208	1
18	INSPEC	27,880	無制限
19	International Political Science Abstracts	2,049	1
20	JDreamII	2008年新規	10
21	Journal Citation Reports	27,709	無制限
22	Medline	29,122	5
23	MLA International Bibliography / MLA Directory of Periodicals	2,429	2
24	Oxford English Dictionary	4,146	無制限
25	Oxford Reference Online	749	無制限
26	ProQuest Dissertations & Theses	16,894	無制限
27	PsycINFO	7,623	4
28	SciFinder Scholar	169,204	7
29	Sociological Abstracts	999	無制限
30	The Times Digital Library	398	1
31	法科大学院教育研究支援システム	6,538	10
32	Ulrich's Periodicals Directory	341	1
33	Web of Science	309,986	無制限
34	医中誌 Web	25,278	4
35	第一法規DB (判例体系, 現行法規, 法律判例文献情報, 現行法規履歴)	No. 31より分離	10
合 計		710,806	

表 2 : 電子ジャーナル (2009年度)

区 分	出版者等	収録 タイトル数	2007年 アクセス数
全 タ イ ト ル ア ク セ ス (出 版 社 系)	ACM (Assoc. Computing Machinery)	407	128
	ACS (Am. Chemical Soc.)	34	207,680
	Annual Reviews	37	5,937
	APS (Am. Physical Soc.)	8	41,015
	CUP (Cambridge Univ. Press)	223	6,823
	e-Duke Scholarly Collection (Duke University Press)	30	116
	Elsevier	2,011	661,133
	Karger	75	8,713
	OUP (Oxford Univ. Press)	166	43,557
	Springer	1,817	87,020
	Wiley-Blackwell	1,246	179,192
	小 計	6,054	1,241,314
全 タ イ ト ル ア ク セ ス (ア グ リ ゲ ー タ 系)	BioOne1 + UniBio	93	7,127
	CiNii (国立情報学研究所論文 情報ナビゲータ)	6,476	2009年新規
	EBSCOhost Academic Search Elite	2,000	13,308
	JSTOR	Arts & Sciences I Collection	175
		Health & General Science Collection	37
		Business Collection	65
	LexisNexis Academic		—
	Lexis at lexis.com		—
	Project Euclid Prime		22
	ProjectMUSE Standard Collection		308
	ProQuest	Academic Research Library	2,440
		Health & Medical Complete	1,221
	メディカルオンライン		600
	化学書資料館		4
	小 計	13,441	72,798
パ ン ク ー ジ	IEEE/TEL (Inst. Electrical and Electronics Engineers/IEEE Electronic Library)	3,000	12,476
	LWW Ovid Fixed 100 (Lippincott Williams & Wilkins)	100	12,921
	小 計	3,100	25,397
個 別 契 約	Nature	40	102,560
	IPAP (物理系学術誌刊行センター)	3	—
	その他	600	657,173
	小 計	643	759,733
合 計		23,238	2,099,242

③ 他部局の利用者が、図書（とくに雑誌）

をその場でコピーにとれる設備をすること

今 全学共通の“図書相互利用規程”は定められていませんが、各部局の図書室は本館、北分館と同様に、学生証または図書館利用証を提示することにより、本学の教職員、学生全員が利用することができます。

また、図書館のホームページから各部局図書室のホームページへのリンクを設けており、図書館及び部局図書室のホームページが図書相互利用のしおりの役割を果たしています。

各部局の図書室には、複写機がほぼ設置されており、雑誌論文などの必要なコピーをとることができるようになっています。他部局に所属する利用者への対応は、全学共通な様式（文献複写申込書を兼ねた複写機使用伝票）を定め、経費の振り替えにより精算を行っています。

部局図書室にある図書については、このように実質的な学内相互利用が行われていますが、研究室にある図書については、「学内にある図書が、きちんとデータ化されるといいと思う。研究室や教授の部屋にある図書も、所在がはっきりしないことがあり苦労している」（学生生活実態調査2006）などの意見が、学内のアンケート調査を行うと寄せられる状態も残っています。

2004年の法人化に際し、北大の蔵書は全て資産として登録されました。これらの資産の1点1点がどこで使用されているか、全学的に図書の確認を継続して行っています。2008年度は37万冊を点検し、所在に間違いがあれば訂正する作業を行っています。目録データの遡及入力と合わせて個々の図書の所在、不明図書の確認を行い、蔵書が共同で相互に利用できるよう、目録データの整備を進めています。

2. 3 図書館業務の機械化

昔 1973年当時、図書館業務の機械化に関しては、「当面直ちに機械化が実現する情勢に

はないとしても、必要な調査研究に怠りがあってはならないであろう」と認識するものでした。

今 インターネットに代表されるように、世界的な情報化社会へと大きく変容をとげ、図書館にも1986年3月に図書館専用計算機が導入され、当時の学術情報センターへの接続、業務の電算処理の開始により、新規受入図書のオンライン検索ができるようになりました。その後の展開について順を追ってみました。

2. 3. 1 蔵書目録データベース

当時の学術情報センターの協力を得て、1987年から電算化以前の図書目録を遡及して入力する事業を始め、4年間で53万冊の図書が検索できるようになりました。事業終了後は、北大独自の遡及入力計画を立て、時には文科省、情報学研究所の支援を受けながら遡及入力続け、全蔵書371万冊の90%にあたる334万冊の入力を終える迄に至りました。

2. 3. 2 北方資料データベース

北方資料データベースでは、蔵書目録のような文字データベースに加えて、画像データベースを作成するようになりました。

1993年度より科学研究費補助金の交付を受けて、はじめは「日本北辺関係旧記目録」など既に編纂されていた目録の記述を文字データベース化しました。続いて、写真、古文書、地図などの画像データの作成、蓄積に着手し、目録の検索に加えて本文の表示をネットワークを介して行えるようになりました。

現在、作成された文字データは6万2千件、画像データは20万9千件を数え、その利用は年間770万頁に及びます。また、そのほとんどが学外ネットワークからの利用で占められています。

2. 3. 3 北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP)

情報化社会の進展は、電子ジャーナルの誕生に見られるように、学術情報の流通形態にも大きな変化をもたらしました。学術雑誌の価格が上がり続けていることへの対応手段として、雑誌論文をオンラインで閲覧できるよう無料の電子ジャーナルを創刊するなどのオープンアクセス運動と呼ばれる活動が起きました。学術研究機関が、その構成員の教育、研究成果をウェブサイトに蓄積し、公開する活動もオープンアクセス運動の一環で、機関リポジトリと呼ばれています。

HUSCAPも、世界に678件構築されているこの機関リポジトリのひとつです。2004年度から検討を始め2006年4月に公開しましたが、その時の登録文献数は4,094件でした。現在、登録された文献は2万6千件を数え、学内の教員の半数を超える方が文献を登録しています。

学内で刊行される紀要に収録された文献の登録も積極的に進めています。紀要が冊子で読まれていた時に比べると、HUSCAPで公開されたことにより、新たな読者を得ていることがわかるとの評価を頂くこともあります。

雑誌論文に加え、教育用資料、学会発表資料、一般誌寄稿文など、本学の研究者の活動成果を社会に還元するメディアとして、その利用は年間68万件を超え、そのほとんどは学外ネットワークからの利用で占められ、開かれた大学の一翼を担っています。

2. 4 図書館職員

昔 職員の待遇及び人事の観点から、2点を提言している。

- ① 学内における図書系職員の人事交流を円滑に行うこと
 - ② 図書系職員の待遇改善に配慮すること
- また、研修の観点からも2点の提言を行っている。

① 学外研修の機会を多くすること

② 学内研修を計画的に、定期的に行うこと

今 「学内における図書系職員の人事交流は、現に、附属図書館の意向を汲んで行われているが、」と報告書に記され、その後もこの方式が維持されてきました。

大きな変化は2007年度にありました。

この年、部局の図書室で行われていた図書の発注、支払い、目録等の管理的な業務を、附属図書館本館に集約しました。業務の集約により事務の効率化を図り、職員の削減が行われています。

部局図書室に働く職員の所属は、部局から附属図書館に変わり、兼務を命じられて当該図書室に勤務しています。

職員の研修の重要性は、今も昔も変わりませんが、職員数が少なくなっている今、個々の職員の能力の開発、向上が急務となっており、その重要性は更に高まっていると言えます。

全学の図書系職員が附属図書館に所属するように変わり、部局図書室に勤務する職員も含めた研修の年度計画を立て、実施することを始めました。2008年度は、学外研修20件に延べ34名が参加しています。

HUSCAPの関係では、国際会議など5件に延べ7名の職員が参加して、海外の動向を調査するとともに、海外との連携について働きかけを行っています。国内においても、電子メールを主とした情報交換に加え、報告会など意見交換の場などに参加して、中心的な役割を果たしています。

学内の研修としては、北海道大学附属図書館講演会を毎年開催しています。この講演会には、学内の職員に加え道内の大学等の図書館職員も参加しています。

2008年は、「大学図書館の現状と課題」をテーマに、嶋貫局長に講演いただきました。

図書館職員による議論に加え、学内、学外に開かれた議論を展開することにより、職員の能

力開発、特に、利用者支援の現場である情報サービスのための能力の向上を図るとともに、その視野を広げることが重要であると思われます。

3. 学生から見た図書館

専門委員会が、1971年9月に行ったアンケート調査と、附属図書館点検評価小委員会が2006年12月に実施した北海道大学附属図書館利用者アンケートの結果から、学生の図書館に対する希望について、その変化を比べてみました。

3. 1 1971年に行ったアンケート調査で、学生の附属図書館に対する不便感が高いもの

	院 生	学 部 生	教養部生
第1位	図書不足	借用期間	日・祭休館
第2位	日・祭休館	図書不足	図書不足
第3位	複写機	日・祭休館	借用期間
第4位	開館時間	複写機	新刊書おそい
第5位	教官長期貸出	新刊書おそい	開館時間
第6位	新刊書おそい	開館時間	複写機

3. 2 2006年に行ったアンケート調査で学生の満足度が低いもの（次ページ）

3. 3 不便感の解消したもの

① 日・祭休館

本館は1997年4月から、北分館は1998年10月から日曜開館するようになりました。また、祝祭日については、本館、北分館ともに2002年4月より開館するようになりました。

2009年度の休館日は、年末年始（12月28日から1月3日）、大学祭期間の土日（北分館）、全学停電の日、共通試験実施日の年間10日（北分館は12日）だけとなりました。

② 開館時間

1971年当時、開架閲覧室は夜の7時まで利用

できました。その後、1981年9月から夜の8時までと1時間延長し、1997年4からは、更に2時間延長して夜の10時まで利用できるようになりました。このように今では、授業あるいは試験のある期間は、平日は9時から夜10時まで、土日祝日は9時30分から夜7時まで開館しています。（休業期と3月は、平日は9時から午後5時まで、土日祝日は9時30分から午後5時まで開館しています。）

3. 4 新たな不満

① パソコン不足

② ビデオ、DVD不足

情報化による新たなニーズとして、パソコン、ビデオ、DVDの希望が出てきました。

2000年4月、北分館に隣接して情報教育館が建設されました。この時、北分館も2階に連絡通路を設けるとともに、マルチメディア公開利用室を整備して、パソコン、視聴覚資料の利用環境を整えました。その後の利用状況を見ると、北分館についてはまだその数が不足しております。本館については改修計画の課題です。

③ 夏季の室温

夏季の室温が高いとの苦情は、温暖化の影響があるのでしょうか。札幌気象台の7月、8月の最高気温の平均を調べてみました。暑くなっている月が出てきています。

	1970年	1971年	1972年	2006年	2007年	2008年
7月	26.2度	23.0度	25.2度	25.1度	24.2度	25.7度
8月	26.2度	24.6度	26.5度	28.8度	28.3度	25.4度

北分館は、2007年度に行った改修で空調設備を整備しました。本館については、2009年度から始まる、本館改修計画の課題です。

④ 利用者の意見を反映する制度

⑤ 所蔵していない文献の学外からの取り寄せ
利用者の意見を反映する制度、所蔵していない文献の学外からの取り寄せに対する不満につ

3. 2 2006年に行ったアンケート調査で学生の満足度が低いもの

	本 館		北 分 館	
	院 生	学 部 生	院 生	学 部 生
第1位	開架閲覧室には十分な質と量の図書が備えられている	夏期間の館内の温度は快適に保たれている	夏期間の館内の温度は快適に保たれている	夏期間の館内の温度は快適に保たれている
第2位	必要な機能を備えたパソコンが十分に用意されている	必要な機能を備えたパソコンが十分に用意されている	開架閲覧室には十分な質と量の図書が備えられている	必要な機能を備えたパソコンが十分に用意されている
第3位	新刊図書が充実している	ビデオ・DVDが十分に備えられている	学習や研究に必要な図書が十分に備えられている	座席数は十分である
第4位	学習や研究に必要な図書が十分に備えられている	利用者の意見を反映する制度が整っている	新刊図書が充実している	所蔵していない文献を学外から迅速に取り寄せることができる
第5位	夏期間の館内の温度は快適に保たれている	新刊図書が充実している	貸出期間・冊数が十分である	新刊図書が充実している
第6位	複写機が十分に適切に配置されている	開架閲覧室には十分な質と量の図書が備えられている	必要な機能を備えたパソコンが十分に用意されている	開架閲覧室には十分な質と量の図書が備えられている

いては、図書館への期待を裏切らないよう、日々の対応の中で改善を図ってゆきます。

⑥ 閲覧席不足

本館、北分館合わせ、閲覧席は1,183席あります。これは、ちょうど学部学生11,833名の10%に当たります。大学設置基準では、数値としての基準は定めていませんが、学生数の10%は守るべき基準と考えられています。学生数と閲覧席数の変化を表にまとめてみました。

年	学部生	院生	本館	北分館
1973	10,630人	1,357人	600席	492席
2008	11,833人	6,389人	632席	551席

1973年以後、本館、北分館ともに増築を行い閲覧席の増加を図っていますが、学生数の増加

の方が上回っている状況です。部局図書室を含めると、閲覧席は1,861席を数えます。学生数は18,222名ですので、全学でようやく、最低基準の10%をクリアしているのが現状です。

3. 5 不便感、不満として継続しているもの

① 図書不足

② 新刊書遅い、不足

2006年のアンケートにおいて、期待は高いが満足度の低い項目が3件ありました。そのうちの2件は、本館、分館に共通して、図書の充実に関する次の項目でした。

- ・学習や研究に必要な図書が十分に備えられている
- ・開架図書室には十分な質と量の図書が備えられている

2008年度から、図書館委員会の下に図書選定

小委員会を設け、教員の学識が反映する図書選定を行っています。今後は、質とともに量の不足解消が課題です。

なお、期待が高く満足度の低かったもう一つの項目は「3. 4 ⑤」に記した、「所蔵していない文献を学外から迅速に取り寄せることができる」でした。

1971年のアンケートで不便感の強かった「教官長期貸出」（これについては、2. 2 相互利用の中でふれました）とともに、図書館に所蔵していない図書、文献の入手を学内または学外に求める、学習、研究を進める上で当然な要望でした。

特に、研究室にある図書については、相互に共同して利用することについて、図書を研究室に所蔵している教員の理解を頂かなければなりません。

③ 複写機

複写機については、各部局の図書室も含めほぼ設置されていますが、利用が多く混雑しているときがあることから、その台数を増やして欲しいとの意見がアンケートで寄せられています。1台毎の利用状況、設置に要する経費を考慮して、設置する台数を検討してゆきます。

④ 借用期間・冊数

貸出の期間、冊数については、限られた蔵書を多くの方に利用いただけるよう定めております。2008年10月から、貸出期限を超える図書が少なくなるよう、延滞に対するペナルティを強くしました。同時に、開架図書の貸出冊数を、5冊から8冊に増やし、多くの図書を借りやすくしました。

4. おわりに

本館が現在の地に全面的に開館したのは、1966年4月でした。

当時は、100万冊の蔵書を収容できる、国立大学の中でも抜群の規模と設備を有する図書館と評価されていましたが、その後の学生の増

加、蔵書の増加により、狭隘化が著しく進行しました。

全学の理解が得られ、初年次における情報リテラシー「図書館情報入門」の充実に加え、2009年度から本館の改築改修工事が行われることとなりました。

ハード面の容れ物の改善に加え必要なことは、図書の選定・収集も含めたソフト面、教育機関としての大学の、教育支援機能の充実であると思われま

す。本館の改修とともに、初年次における情報リテラシー「図書館情報入門」の充実に加え、図書館と授業及び教育を担当する教員との連携の検討について、全学の協力を仰ぎ、学生のための充実した学習支援の実現を図らなければなりません。

お知らせ

来館日誌

(平成20年11月～平成21年2月)

No.	来館者	来館日	時間	人数	備考
1	釧路湖陵高校生徒及び教員	1月30日(金)	9:30-11:30	7	図書館見学 及び実習



カウンター業務を体験する釧路湖陵高校生徒

海外出張報告会を開催しました

平成20年度に海外出張に行った職員による報告会を、12月24日に開催しました。

これは、海外出張で得られた知見等を全学の図書系職員等にプレゼンテーションすることを通して情報の共有を図ろうとするものです。約30名の図書系職員のほかに図書館委員会委員、学術成果発信小委員会委員の参加もあり盛況のうちに終了しました。

4本のプログラムはそれぞれ15分程度の発表と5分程度の質疑応答がありました。最初から三番目までは、HUSCAP（北海道大学学術成果コレクション）と国立情報学研究所のCSI事業（最先端学術情報基盤推進事業）を進めていくための出張です。

- 1) SPARC Digital Repositories Meeting 2008への参加とAIRwayの普及を目的としたCARL及び近隣機関（オタワ）訪問について

発表者：野中雄司（情報システム課）

概要：SPARCが主催する機関リポジトリ推進のための国際会議(The SPARC Digital Repositories Meeting 2008)への参加及びAIRway(Access path to Institutional Resources via link resolvers)という北大附属図書館が中心となり推進しているリンクリゾルバによる機関リポジトリ等に登録されたオープンアクセス文献へのナビゲーションを目的とした研究開発プロジェクトの普及活動のため、オタワ大学構内にあるCARL(カナダ研究図書館協会)やオタワ大学、国際研究開発センター、カナダ科学技術情報研究所への訪問。

- 2) すべての研究成果をその読者に：DC2008ポスター出展とTIB訪問について

発表者：紙谷五月（情報システム課）、問谷実希（情報管理課）

概要：ドイツで開催されたメタデータに関する国際会議であるDC2008への参加及びAIRwayについてのポスターの出展、ドイツ国立科学技術図書館(TIB)の訪問。

- 3) オープンアクセス活動の現在：Berlin 6 会議と英国関連機関訪問

発表者：杉田茂樹（情報システム課）

概要：ドイツで開催された学術雑誌・論文の無料公開推進に関するオープンアクセス会議(Berlin 6)出席及びHUSCAPの広報についてのポスターの出展、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、国際DOI財団、CrossRef事務局への訪問。

- 4) 北海道大学協定校交流事業（カリフォルニア大学デービス校、バークレー校、ロサンゼルス校）

発表者：東朋子（情報サービス課）、城恭子（情報システム課）

概要：カリフォルニア大学図書館での利用者サービス、機関リポジトリ等の現状視察。
(情報管理課)

海外出張報告

学術情報流通の現在——ドイツ，英国出張報告

附属図書館情報システム課 杉 田 茂 樹

平成20年11月10日から15日にかけて、デュッセルドルフで開催されたBerlin6オープンアクセス会議に参加するとともに、ドイツ及び英国の関連学術機関を訪問し、オープンアクセス活動を中心とした学術情報流通の近年の動向について情報交換を行いました。

我が国では、2000年前後から外国文献に対する図書館間文献複写（ILDD）の発生件数が減少してきており、日本語文献についても2007年を境として減少に転ずる徴候が見られます。大規模な文献デリバリーの枠組みであるドイツのSUBITOにおいても、処理件数が大きく減少しつつあるようです（図1）。国内のILDD減少については、電子ジャーナルの出版社単位包括契約による利便性の向上と、国内学会誌や大学紀要の電子化の進展がその要因と考えられています。これは世界的に共通の傾向なのでしょうか。

ケルン日本文化会館（ドイツ）の蓮沼龍子主任司書を通じて得られたSUBITO所長の見解によれば、ドイツでは国家規模の電子ジャーナル購読契約の拡大によってエルゼビア社やシュプリングァー社の学術雑誌バックファイルを含む膨大な電子資料がオンライン利用可能となったこと、また一方、著作権法の改正により、電子ファイル送付による文献デリバリーサービスが不可能となり利便性が減じたことが処理件数減少の要因と考えられているとのことでした。電子的流通手段の有無が、学術文献への需要が十全に満たされるための大きな鍵となっていることが感じられます。

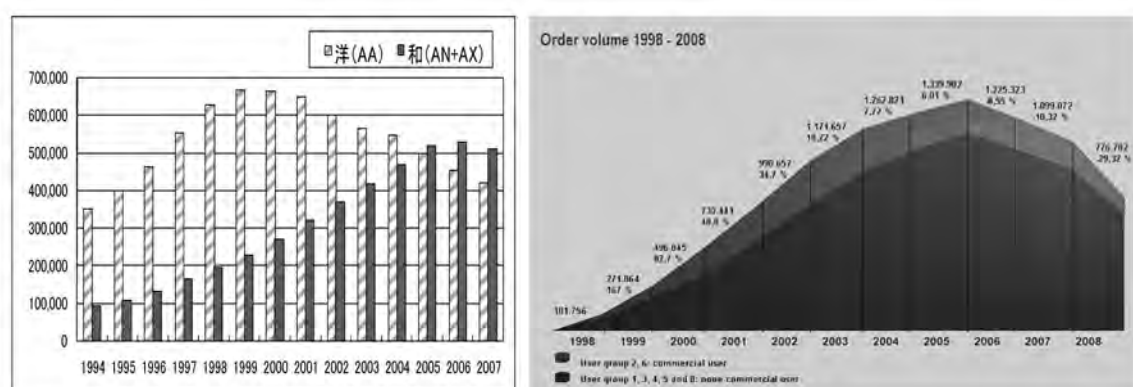


図1 文献供給サービスの量的推移（左：日本（NACSIS-ILL），右：ドイツ（SUBITO））

オープンアクセス活動の興隆は、学術情報流通環境の総体的な改善に寄与します。デュッセルドルフ（ドイツ）で開かれたBerlin 6 オープンアクセス会議（図2）には、研究者、学術出版社、図書館司書、ネットワーク技術者を含む幅広い参加があり、オープンな学術情報流通のさまざまな形と可能性について議論が交わされました。

なかでも、マックスプランク協会やカリフォルニア大学によるシュプリングァー社との包括オープン

アクセス契約（シュプリンガー社の学術誌に発表された所属研究者の著作論文が、同社電子ジャーナル上で無料公開となる契約）や、SCOAP 3（素粒子物理学の代表的な学術誌について、各機関が負担する購読料によらず、世界中の素粒子物理学コミュニティの共同出資により出版そのものを維持運営するという経済モデルの提案）が目を引きました。これに限らず、今後さまざまな学術情報流通のコスト負担モデルが試みられるでしょう。大学及び大学図書館はその重要な当事者のひとりとして真摯に取り組んでいく必要があると感じました。「われわれは費用効率が最も良好である（cost-effective）ことを求めたいのであって、最安値（cheapest）を求めるのではない」との言葉が印象的でした。



図2 Berlin6オープンアクセス会議（左）と、会場となったデュッセルドルフ大学（右）

オープンアクセス活動の一翼を担う機関リポジトリ（大学が運営する学術文献公開サイト）は、本学が設置する北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）を含め、現在世界に600以上を数え、利用可能な文献は330万編にのぼります。

機関リポジトリの興隆を目指すデジタルリポジトリ連合の活動報告書『平成18～19年度の活動と今後の展望』（平成20年3月）の序には「図書館職員なら誰もが、機関リポジトリの運用を担えるようになるべきである。」（逸見附属図書館長）とあり、機関リポジトリ運営のための人材育成とノウハウの継承は全国的な課題となっています。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで話を伺ったジョン・マーター氏（図3）は、前年までブルーネル大学において機関リポジトリを主導していた方です。いずれの大学においても、目的特化型のプロジェクトチームが編成され、必要十分な一定期間にわたってキーパーソンを中心としつつ、各サービスポイントに分散したリエゾンライブラリアンとの柔軟な協力体制を築いて事業が展開されてきたとのことでした。国内でも、専任担当者に依存しすぎない全館体制で機関リポジトリ構築に取り組む



図3. ジョン・マーター氏と

大学図書館は少なくありません。先に述べた通り、オープンアクセス活動のバリエーションとその影響は、機関リポジトリ構築にとどまらず、大学図書館活動のさまざまな局面（雑誌契約形態、文献供給サービスのありよう）に広がっています。クロスファンクショナルな体制に基づくより弾力的、機動的な事業運営が今後ますます求められるように感じました。

最後に訪れたオックスフォードでは、国際DOI財団のノーマン・パスキン氏及びCrossRefのエド・ペンツ氏を訪問しました（図4）。

電子情報流通環境下においては、研究論文が物理的に紙に固定された状態で配送される場合に比べ、ネットワーク上に存在する学術文献を一意に識別できるようにする枠組みが格段に重要です。

国際DOI財団は、電子ファイルに与えられる「デジタルオブジェクト識別子（DOI: Digital Object Identifier）」を、インターネット上のアドレス（URL）と結びつけて管理する非営利組織です。また、CrossRefは電子ジャーナル掲載論文にDOIを設定するために出版社連合によって立ち上げられた非営利組織です。研究論文の書誌所在情報がDOIを通じて一元管理されることにより、さまざまな文献書誌データベースからのアクセス性が高まり、また、一意の識別子の存在は当該文献ファイルの正本性の保証にもつながります。HUSCAPでは、50を超える研究紀要等を電子ジャーナル化しています。CrossRefないし他の仲介組織への参加には一定の料金が課されますが、本学の学術研究へのアクセス性をより高めるための選択肢のひとつとして、DOIの取得は検討の価値があるものと感じました。

最後になりましたが、今回の出張にあたって、附属図書館の皆様から多大なご配慮をいただいたことに感謝します。



図4. CrossRef英国事務所

The SPARC Digital Repositories Meeting 2008への 参加とカナダ訪問

附属図書館情報システム課 野 中 雄 司

はじめに

附属図書館では、「北海道大学学術成果コレクション：HUSCAP」の関連事業として、国立情報学研究所の学術機関リポジトリ構築連携支援事業（以下CSI事業という）の委託を受け、「機関リポジトリコミュニティの活性化」という事業を他大学と協同で行っています。今回はこの事業の支援を受け、平成20年11月17日から22日にかけて米国、カナダを訪問し、The SPARC Digital Repositories Meeting 2008へ参加すると共に、カナダの4つの機関を訪問し、同じくCSI事業の委託を受けている「機関リポジトリ上の情報資源の発見及びアクセス性の向上のための調査研究開発」事業（通称AIRwayプロジェクト）の広報普及と機関リポジトリについての意見交換を行ってきました。

11月17-18日 The SPARC Digital Repositories Meeting 2008参加

11月20日午前 CARL(Canadian Association of Research Libraries)訪問

11月20日午前 University of Ottawa訪問

11月20日午後 IDRC(International Development Research Centre) 訪問

11月21日午前 CISTI(Canada Institute for Scientific and Technical Information) 訪問

The SPARC Digital Repositories Meeting 2008への参加

SPARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition) は、米国において、研究者による学術雑誌刊行の電子化支援を通して価格高騰の問題を解決する競争的市場を創出することを目的として設立された団体です。近年ではその活動にとどまらず、研究成果への障壁なきアクセスを目指すオープンアクセス(Open Access)という運動にも関わってきています。また、ヨーロッパではSPARC Europe、日本ではSPARC Japanが設立されています。



The SPARC Digital Repositories Meeting 2008
会場風景

The SPARC Digital Repositories MeetingはこのSPARC 3 者が主催する国際会議で、米国のボルチモアで開催されました。会議は、図書館員にとどまらず、研究者、ソフトウェア開発者、出版関係者など300人を超える参加者があり、今回はこの会議に世界的な機関リポジトリの動向を把握することを目的に参加してきました。会議の内容については、大きな国際会議ということもあり、機関リポジトリに関する様々な話題が提供されていました。詳しい内容については金藤氏の報告¹がありますのでそちらをご参照ください。以下は会議に参加しての感想です。

米国での開催だったこともあり、米国の事例が多かったものの話されている内容は日本の状況とさ

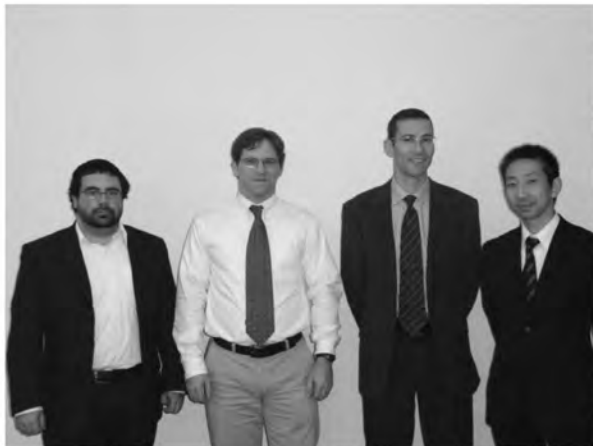
して変わらないという印象を持ちました。現在世界の機関リポジトリの状況は、機関リポジトリ自体が比較的新しい試みであることもあり、国あるいは地域単位での連携、サポートが多く見られます。

日本においてもCSI事業による機関リポジトリ構築支援、Digital Repository Federationによる機関リポジトリのためのコミュニティ構築等により各機関リポジトリ間の情報共有が行われています。今回米国の状況と対比させることにより、この努力が日本の状況が世界とさして変わらないという環境を作っているものだという思いを強くしました。ただし、その中で米国ではいまだ目立って米国内での連携というものが無いせいか、個々の大学等のレベルで様々な取り組みがなされており、現在の学術情報流通の状況を大幅に変化させる可能性があるのは確固としたポリシーがない、固まっていない米国ではないかとも思いました。米国では大から小まで多様なオープンアクセス、機関リポジトリに対する考え方があり、やはり米国の大きさ、奥深さを感じたミーティングでもありました。

機関リポジトリ関連機関訪問（オタワ）

カナダのオタワにある機関リポジトリに関連する4つの機関へAIRwayプロジェクトの広報普及活動と機関リポジトリについての意見交換を主な目的として訪問してきました。AIRwayとは、データベースの検索結果などから電子ジャーナルの論文本体へのリンクを表示させるリンクリゾルバを活用し、同様に機関リポジトリ上の論文本体へのリンクも表示させるようにするもので、機関リポジトリ上の論文の可視性をより向上させることを目的とした研究開発プロジェクトです。CARLは米国Association of Research Libraries(ARL)のカナダ版のような組織です。機関リポジトリについてもカナダ全体のプロジェクトの統率などカナダの中で中心的な役割を担っています。オタワ大学は最近機関リポジトリを構築したとのことで、またCARL事務所がオタワ大学内にあったこともあり、オタワ大学の担当者からもお話を伺いました。またIDRCについては、日本におけるJICAの研究部門のような機関であり、IDRCから発行される資料及び資金助成した研究成果の機関リポジトリを構築しています。CISTIは国立の科学情報図書館であり、世界的なドキュメントデリバリーサービスで有名です。またCISTIの一部門として「NRC Research Press」という出版事業を持っており、16誌の国際研究雑誌、書籍、会議録を刊行しています。これらはカナダの人々にはオープンアクセスで提供され、研究成果の提供については経験が十分あり、またその意識も高いと感じられました。CISTIについては、2009年1月に機関リポジトリを公開するとのことでお話を伺ってきました。

カナダでは世界的にみてもはやい段階からCARLを中心に機関リポジトリ、オープンアクセスの啓蒙活動が行われており、そのためか今回訪問した機関はどこも研究成果の提供、またその可視性の向上については意識が高いと感じられました。そのため機関リポジトリへの理解度も高くAIRwayのような一見複雑なサービスについても非常に興味を示されていました。またカナダではCARLが中心となって機関リポジトリのプロジェクトを行うことにより機関リポジトリへの知識がかなり共有化されているようにも感じられ、CARLのような国全体をリード、集約できる役割をもっている組織があることは機関リポジトリ構築にはとても重要であると感じられました。



左上：サム・ボボウィッチ氏（オタワ大学図書館），
ディエゴ・アルカエズ氏，ブレント・ロー氏
（以上CARL），野中

右上：野中，バーバラ・ポレット氏，サチコ・オクダ
氏（以上IDRC），金藤伴成氏（筑波大学附属図
書館）

左下：野中，ナオミ・クリム氏，アリソン・ボール氏
（以上CISTI），ディエゴ・アルカエズ氏，
（CARL），金藤伴成氏（筑波大学附属図書館）
（以上全て左から）

さいごに

今回のアメリカ・カナダ訪問で感じたことは、世界的な機関リポジトリの創世期にCSI事業が開始されたこともあり、日本は世界と比較しても決して遅れをとっているわけではなく、先頭の少し後ろくらいを走っているのかなと感じられました。また、学術研究の世界では日本は質量共に世界トップレベルですが、流通の世界では日本がイニシアチブをとっているとは言えない状況であると思います。一方産出、流通の世界では末端にいた図書館ですが、機関リポジトリ事業によって好むと好まざるに関わらずこの世界に足を踏み入れてしまったという状況であると思います。この状況で我々は世界の潮流に乗り遅れてはならない（要するに流通でもイニシアチブをとり日本の論文を世界に読まれやすくする）であろうし、先頭集団で走れる可能性も今はまだあるのではないかと思います。

今後はより世界に向けて日本の状況を発信しこの世界で先頭集団で走ることが、たとえ機関リポジトリとは違う形で学術情報流通の仕組みが変わったとしても、日本及び日本の大学図書館にとって大きな糧になるだろうと感じられた訪問になりました。

¹金藤 伴成. “集会報告：SPARC Digital Repositories Meeting 2008”. 情報管理. Vol. 51, No. 11, (2009), 833-836 . (doi:10.1241/johokanri.51.833)

カリフォルニア大学を訪問して

附属図書館情報サービス課 東 朋 子
附属図書館情報システム課 城 恭 子

1. はじめに

平成20年12月9日から12日にかけて、カリフォルニア大学の3校（デービス校、バークレー校、ロサンゼルス校）を訪問しました。これは、平成20年度総長室重点配分経費・大学間協定校交流事業の助成を受けて実施したもので、各校にて図書館における利用者サービスと機関リポジトリに関する意見交換を行い、これからの本学における図書館運営を考える上での一助とすることを目的としています。

2. 訪問先各校の概要

デービス校 (University of California, Davis)

広大な敷地に100以上の専攻を持つデービス校は、学生数約3万人、教職員約2万8千人を抱える総合大学です。図書館はデービス地区に3つ、サクラメントに1つを設置しており、図書職員は4館合計で300人弱となっています。デービス校では、同校の中央図書館に当たるPeter J. Shields Libraryを訪問し、図書館内を見学した後、図書館における利用者サービスと機関リポジトリについて、本学のプレゼンテーションを行い、各担当者とディスカッションをしてきました。



Peter J. Shields Library



Valley Life Sciences Buildings

バークレー校

(University of California, Berkeley)

カリフォルニア大学の本部であるバークレー校は、約3万4千人の学生と約2万2千人の教職員が在籍し、研究・教育に励んでいます。

バークレー校では、同校の生命科学院 (Valley Life Sciences Buildings) にて、機関リポジトリを中心に担当者と意見交換を行いました。

ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles)

本学とは平成20年6月に交流校の協定を結んだばかりのロサンゼルス校は、カリフォルニア大学一の学生数・教職員数を誇っており、それぞれ約4万人が在籍しています。今回は、同校の中央図書館に当たるCharles E. Young Research Libraryを訪問しました。

以下、テーマ別に各校での訪問の詳細を紹介します。



Charles E. Young Research Library

3. 利用者サービス



ロサンゼルス校にて（左端が東）

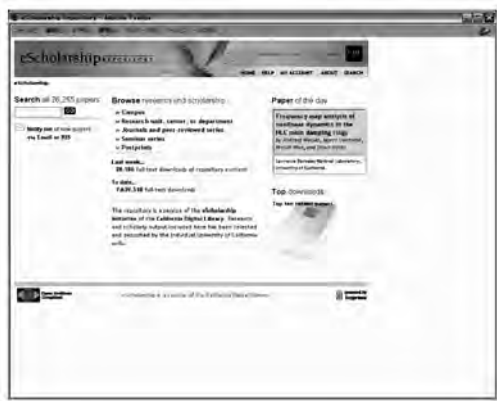
利用者サービスに関しては主に、相互利用業務（他大学の図書館等との文献複写業務および図書等の現物貸借業務）と、利用支援業務についてのディスカッションを行いました。

同じカリフォルニア大学でありながらも、各校では独自の方針で利用者サービスを展開しており、学内の相互利用業務一つをとっても、デービス校では市の援助を受けたり学生のクラブ活動費などを充用したりすることによって学内の相互利用サービスを無料にする一方、ロサンゼルス校では、身分を問わず一件の依頼につき利用者に一定の金額を課している、という違いがありました。

利用支援業務についても各校で様々な取り組みを行っていました。特筆すべきは各校の利用支援スタッフの育成と、スタッフ間での情報交換を促進するシステムで、デービス校は採用時に個々人の能力に応じたマンツーマンの研修制度があり、ロサンゼルス校では毎週のワークショップやスタッフミーティングによりスタッフ間での活発な意見交換を行っているとのことでした。いずれも大学や図書館が主体となって積極的に推し進めており、さらにスタッフ個人の自己研磨も重なって、図書館の利用者サービスの水準の保持と向上が図られているとのことでした。

4. 機関リポジトリ

カリフォルニア大学10キャンパスをカバーする機関リポジトリeScholarship Repository 1) は、



eScholarship Repository トップページ

登録コンテンツ数約26,000件、総ダウンロード回数760万回以上を誇る、世界でも有数のコレクションです。

また、大学に所属する研究者の研究成果をインターネットを通じて世界に公開するだけでなく、電子出版プラットフォームの役割も担っていることが大きな特徴です。現在までに約20誌の電子ジャーナルをeScholarship Repositoryで発行し、公開しています。

大手出版社であるSpringer社とカリフォルニア大学の間で、独自の雑誌契約を締結したということについてもお話を伺いました。Springer社から出版される雑誌に、カリフォルニア大学構成員が投稿した論文が掲

載された場合、個々の論文をオープンアクセス（無料公開）化するかどうかの選択権が著者に与えられるというものです。

カリフォルニア大学バークレー校では、BRII (Berkeley Research Impact Initiative) 2) という独自のプロジェクトを試験的に実施しています。これは、バークレー校の構成員が論文を雑誌に投稿

するときに、BRIIに申請して許諾が下りれば、研究成果を無料公開するための費用を大学と図書館で助成するというものです。学内の研究者からは好意的な反応を得ているということでした。

5. おわりに

カリフォルニア大学の各校においては、それぞれ独自の方法で利用者サービスを行っているものの、医学や薬学をはじめ、工学、地学、言語学、心理学など、分野別に配置されている利用支援業務専門の司書が高度なサービスをしていることや、大学や図書館自体がそのような専門的図書館職員の採用と育成に力を入れている点は共通しており、図書館でのこのような取り組みが、活発な利用者サービスを支える礎として重要な役割を果たしていました。

またカリフォルニア大学では、前述してきたようなプロジェクトを通してさまざまな角度からオープンアクセス（無料公開）活動を推進しています。オープンアクセスという概念を広く知ってもらうこと、また継続して周知し続けることによって、研究の活性化と、大学の研究成果の社会還元の一助になりたいという理念は、北海道大学の機関リポジトリである「北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP)」³⁾ が目指すものと同じであると感じました。またeScholarship RepositoryやBRIIのように、図書館から積極的に研究成果をアウトプットするモデルを提示していくという試みは、今後の課題として非常に参考になりました。

今後は、各担当者との交流を続けるとともに、今回の経験を活かし、本学の図書館の利用者サービスならびに機関リポジトリの効果的な運用に努めたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中大変ご親切に対応してくださいましたカリフォルニア大学デービス校、バークレー校およびロサンゼルス校の皆様、ならびに快く送り出してくださいました、附属図書館をはじめとする本学関係者の方々に、心より感謝申し上げます。



(左から) 城, BRII担当者

- 1) eScholarship Repository <http://repositories.cdlib.org/escholarship/>
- 2) BRII <http://www.lib.berkeley.edu/brii/>
- 3) HUSCAP <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/>

コラム

附属図書館貴重資料室紹介

新渡戸稲造と宮部金吾

・ ツューンベリー (ツンベルグ)

《写真1》は、附属図書館・貴重資料室で所蔵している「Thunberg, Carl Peter著, Voyages de C.P. Thunberg, au Japon (1796年刊)」です。タイトルは、「C.P. Thunbergの日本紀行」とでも訳すでしょう。

著者Thunberg (ツューンベリー, ツンベルグとも呼ばれています。1743-1828) は、スウェーデン人で、ウプサラ大学で植物分類学で有名なリンネから医学と博物学を学びます。卒業後、世界各地の植物を調査するため、オランダの東インド会社に医者として勤務し、1775(安永4)年8月から翌1776年12月まで約16ヵ月間、長崎のオランダ商館に医者としてやってきます。

このように医者として長崎のオランダ商館に滞在し、帰国後日本を紹介する本を書いたケンペルやシーボルト(どちらもドイツ人)が有名ですが、彼らと同じ方法です。「そういう方法をとって日本に来る」ということは、それだけ当時のヨーロッパでは、鎖国時代の日本を知りたいという要求があったのでしょう。もともとこの本はツューンベリーがスウェーデン語で書き、その後英語・ドイツ語・フランス語に翻訳されます。この本は、フランス語版でパリ国立図書館のラングレー(Langres, L)が翻訳しています。書かれている内容は、1770年にツューンベリーがウプサラを離れるところから、1779年スウェーデンに戻るまでの『旅行記』で日本旅行は主要な目的ですが一部です。タイトルに『Japon』と入れたのはフランス語訳したラングレーで、そこから日本に対する注目度の高さがうかがえます。



写真1 Voyages de C.P. Thunberg, au Japon
Thunberg, Carl Peter著, Langres, L. 訳
1796年



写真2 Thunbergの肖像
Tome 1より

このフランス語版が出版されたのが1796年と古いため、貴重な珍しい本としてあちこちの展示で良く見る本ですので、ご存知の方も多いでしょう。また、日本語にも翻訳されています。昭和3(1928)年・駿南社刊の異国叢書・『ツンベルグ日本紀行』(山田珠樹訳、昭和41(1966)年雄松堂から復刻)は、フランス語版から日本部分のみを抄訳したもの、東洋文庫『江戸参府紀行』(高橋文訳、平凡社、1994年)はスウェーデン語版から日本部分を抄訳したものです。興味のある方はご覧ください。

・宮部と新渡戸

この本が珍しいのは、本の古さや内容の珍しさから来る『本自体』だけではありません。より珍しく・興味深いのは、『本自体』より『入手経路』かもしれません。蔵書印などから本の来歴を追いかけてみましょう。本に押されている印などを列举すると、

- ・『寄贈 宮部一郎』(各巻見返し)
- ・『宮部文庫』(各巻標題紙) [写真3]
- ・『Library of Inazo & Mary Nitobe, 新渡戸図書』(各巻標題紙) [写真3]
- ・『Inazo Ota, Bonn a/R, VII 17, 1887』(第3巻表紙裏) [写真4]

です。



写真3 Tome 3 (第3巻)の標題紙の部分

写真4 Tome 3 (第3巻)の表紙の裏

順番に見ていくと、『寄贈 宮部一郎』は寄贈を受けた附属図書館が押印・記録したものです。宮部一郎さんは、家の光協会元会長で宮部金吾(札幌農学校2期生)の息子さんです。『宮部文庫』は、宮部一郎さんの父・宮部金吾の蔵書のことです。附属図書館・貴重資料室には宮部文庫として宮部金吾の旧蔵書の一部を所蔵しています。貴重資料室の宮部文庫を見ると、何種類かの『宮部文庫』という蔵書印があるのですが、そのなかの一つが、このツェンペリーの本に押してある『宮部文庫』の印です。このことから、この本は、宮部金吾が持っていて、その本を息子の一郎さんが寄贈してくれた、と推測できます。

『Library of Inazo & Mary Nitobe, 新渡戸図書』の丸い印は、新渡戸稲造(札幌農学校2期生)の蔵書印です。附属図書館貴重資料室にある新渡戸文庫を見ると、同じ印を押してある本がたくさんあるので、この本は新渡戸稲造の手元にあった本と見て良いでしょう。

最後の『Inazo Ota, Bonn a/R, VII 17, 1887』は『太田稲造, Bonn am Rhein, 1887年7月17日』ということを示していると思われます。「太田稲造が、1887年7月17日にボンでこの本を購入あるいは

は読了した」ということでしょう。『太田』は、新渡戸の旧姓です。新渡戸稲造は1862(文久2)年に新渡戸家に生まれ、新渡戸姓を名乗りますが、叔父の養子となり太田姓を名乗り、その後また新渡戸姓に戻ります。太田姓を名乗っていたのは1871(明治4)～1889(明治22)年の期間です。新渡戸は、1887年3月まで米国ジョンズ・ホプキンス大学に留学していましたが、ドイツ留学を命じられ、5月ニューヨークから出帆し、6月末にボンに到着しています。この書き込みは、「1887年7月17日、ボンでこの本を購入した」ということでしょう。

宮部金吾と新渡戸稲造は、札幌農学校在学中は同じ2期生ということもあり、親しい友人でした。札幌農学校卒業後の進路は違いますが、卒業後も親密な友人であり、『新渡戸稲造全集、22巻(教文社)』にあるように多数の書簡をやり取りしています。1887(明治20)年当時、宮部金吾は米国ハーバード大学に留学しています。書簡を見ると、宮部金吾と新渡戸稲造はお互いが入手しにくい欧州・米国の文献を、お互いにリストを送り、それぞれが買って送りあっています(宮部金吾からの1888年1月29日付書簡、参照:新渡戸稲造の世界、16号、pp.269-271)。チューンベリーの『旅行記』は、一旦、新渡戸の蔵書となっていることから、こういった宮部からの依頼とは関係なく購入したのでしょうか。

新渡戸が太田姓から新渡戸姓に戻るのは1889年。また、新渡戸がMaryと結婚するのは1891年ですので、少なくとも1891年までこの本は新渡戸の手元にあり、その後、宮部金吾の手にわたりそれが子息・一郎さんの手によって寄贈されたことがわかります。

宮部と新渡戸とが交わした書簡を新渡戸稲造全集で探してみたのですが、残念ながらこの本について書いている文章を見つけることはできませんでした。どのようなきっかけでどのような会話が交わされてこの本が新渡戸から宮部へ渡ったかはわかりません。120年前、新渡戸がドイツ・ボンで何を考えてこの本を購入したか。その後、宮部と新渡戸の間でどのような会話が交わされて、この本が宮部へと渡ったか想像してみるのも楽しいのではないのでしょうか。

実は、このチューンベリー『旅行記』は、昔、本館書庫1層の普通の洋書の中に混じっているのを見つけたものです。本そのものも当然ですが、蔵書印を見てびっくりしました。その後、この本は創基120年(1996(平成8)年)の際に図書館での展示の目玉として出展したことがあります。その時は、この本の来歴の説明を書くことができませんでしたので、今回、種明かしをしておきます。

また、貴重資料室には、チューンベリー旅行記のドイツ語抄訳版『Reisen in Afrika und Asien, vorzuglich in Japan, wahrend der Jahre 1772 bis 1779 (1792年刊)』があります。この本に北海道大学名誉教授・上原轍三郎氏が購入時に書いたと思われるサインが入っています。興味ある方はご覧ください。

(北方資料室)

教員著作寄贈図書

(平成20年10月16日～平成21年 2 月10日)

寄 贈 者	所 属 部 局	寄 贈 図 書	所 在
佐藤 公治	教育学研究院・教授	保育の中の発達の様 / 佐藤公治著. - 東京：萌文書林, 2008. 10. - (幼児教育知の探究 ; 5)	本館・開架・教員著作
佐藤 鍊太郎	文学研究科・教授	禅の思想と剣術 / 佐藤鍊太郎著. - 東京：日本武道館. - [東京]：ベースボール・マガジン社（発売），2008. 12.	本館・開架・教員著作
古屋 温美	水産科学研究院・特任准教授	漁村など小地域の産業連関分析：分析事例と応用. - 東京：全国漁港漁場協会，2008. 8.	本館・開架・教員著作 北分館・開架・一般

ご惠贈誠にありがとうございました。

図書館では本学教員が執筆した図書を収集しています。新たに本を出版される際には、是非ご惠贈くださるようご協力お願い致します。また、北京大学図書館との相互交流および協力に関する覚書の締結に基づき、北京大学との交換用にもう1冊分、ご寄贈いただきますようご協力をお願い致します。とりまとめは、附属図書館で行います。

学術成果コレクション(HUSCAP)寄贈文献

(平成20年10月16日～平成21年 2 月10日)

80名の研究者の方から、325件の論文等を寄贈いただきました。

また、新たに10研究科等の18タイトルの紀要（文献411件）が公開されました。

HUSCAPについて詳しくは、<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/> をご覧ください。



ご惠贈誠にありがとうございました。図書館では本学教員が執筆した著作の原稿ファイルを収集し、HUSCAPにて保存・公開しています。新たに論文等を発表された際には、是非ご惠贈くださるようご協力お願い致します。ファイルは、repo@lib.hokudai.ac.jp宛にメールでお送りいただくだけで結構です。

会議(平成20年11月15日～平成21年3月18日)

【学 内】

◎図書館委員会

○第214回〈12月24日(水)〉

議題

1. 附属図書館第二期中期目標・中期計画案について
2. 平成22年度概算要求事項について
3. その他

報告事項

1. 附属図書館本館改修計画策定の進捗状況について
2. 国立大学法人・大学共同利用機関法人の平成19年度に係る業務の実績に関する評価について
3. 平成20年度第1回及び第2回北分館委員会について
4. 平成20年度第1回及び第2回図書選定小委員会について
5. 平成20年度第1回学術成果発信小委員会について
6. 平成21年度次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業総合目録データベース遡及入力事業の実施について
7. 全学の蔵書点検計画について
8. 本館、北分館夏期蔵書点検結果について
9. 札幌キャンパス内における文献複写業務の試行中間報告について
10. 本館電動集密書架設置に伴う資料の移動について
11. 本分館の閲覧機の間仕切りの取付けについて
12. Web上での図書予約方法の変更(学生のみ)及び延滞者に関する督促メールの自動送信化について
13. 附属図書館目的積立金について
14. 図書館関係諸会議について
15. 北大時報から

○第215回〈3月18日(水)〉

議題

1. 北海道大学図書館委員会規程の改正について
2. 附属図書館事務部の課名変更に伴う内規の改正について
3. 平成22年度学術研究コンテンツ整備について
4. 平成21年度教育用図書整備計画について
5. 平成20年度附属図書館事業計画の点検・評価について
6. 本館書庫重複図書の不用決定について
7. 札幌キャンパス内における文献複写業務の実施について
8. 展示会出品資料貸出要領等について
9. その他

報告事項

1. 本館改修計画策定の進捗状況について

2. 平成20年度第1回点検評価小委員会について
3. 平成20年度第2回学術研究コンテンツ小委員会について
4. 平成20年度第3回図書選定小委員会について
5. 夜間開館時の職員体制について
6. 平成21年度附属図書館本館・北分館開館日程について
7. 平成20年度（春期）蔵書点検について
8. 督促メール自動送信について
9. 予約時のパスワード設定について
10. 平成20年度第2回学術成果発信小委員会について
11. 平成21年度次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業総合目録データベース遡及入力事業への応募について
12. 図書館関係諸会議について
13. 北大時報から

◎北分館委員会

○第148回〈11月18日(火)〉

議題

1. 北分館学生用図書の重点整備の推薦図書について

報告事項

1. マルチメディア室視聴覚機器の更新について
2. 平成20年度全学教育予算要求に関わる予算確定について
3. 消防避難訓練の実施について
4. ガス事故について

◎学術研究コンテンツ小委員会

○平成20年度第2回〈1月21日(水)〉

◎図書選定小委員会

○平成20年度第3回〈1月28日(水)〉

◎学術成果発信小委員会

○平成20年度第2回〈3月9日(月)〉

◎点検評価小委員会

○平成20年度第1回〈3月11日(水)〉

【学 外】

◎国立大学図書館協会

- 北海道地区協会部課室長会議〈11月27日(木)〉(北海道大学)
- 臨時理事会〈12月10日(水)〉(東京大学)
- 学術情報委員会〈2月27日(金)〉(東京大学)

○臨時総会（文書会議）〈2月27日(金)〉（東京大学）

◎北海道地区大学図書館協議会

○幹事館会議 第1回〈3月2日(月)〉（北海道大学）

◎北海道図書館連絡会

○北海道図書館連絡会議（第2回）及び北海道図書館大会運営委員会（第1回）〈11月19日(水)〉
（道立図書館）

○図書館年鑑2009北海道ブロック協力者会議〈1月15日(木)〉（北海道大学）

○北海道図書館大会運営委員会（第2回）〈2月4日(水)〉（道立図書館）

各委員会等委員変更について

任満了等により以下の委員会委員の変更がありました

図書館委員会

平成21年3月1日現在

所 属	職 名	氏 名	電 話	任 期	備 考
獣医学研究科	准教授	奥 祐三郎	5196	21. 3. 1～22. 3. 31	新 任

学術成果発信小委員会

平成21年3月1日現在

所 属	職 名	氏 名	電 話	任 期	備 考
獣医学研究科	准教授	奥 祐三郎	5196	21. 3. 1～22. 3. 31	新 任

図書館日誌（平成20年11月～平成21年2月）

月日	項 目	月日	項 目
11月		18	第2回ERMS実証実験会議(東京)(情報管理課)
5-7	情報探索入門	19	札幌市中央図書館見学(情報サービス課)
6	平成20年度第2回附属図書館中期目標・計画検討 ワーキンググループ会議	19	GIF, WGキックオフミーティング(東京)(情報サ ビス課)
10	SSO実証実験中間報告会(東京)(情報システム課)	24	第214回図書館委員会(平成20年度第5回)
10-11	事務情報化講習会Access初級(情報管理課, 情報 サービス課, 情報システム課)	24	海外出張報告会
10-11	EUiトレーニングセミナー(東京)(情報サービス課)	1月	
11	情報探索入門	8	平成21年度学術ポータル担当者研修に関する打 ち合わせ(東京)(情報システム課)
11-14	西洋社会科学古典資料講習会(東京)(情報システム課)	9	平成20年度第3回楡蔭編集委員会
11-17	Berlin 6, 国際DOI財団出張(ドイツ)(情報システム課)	15	国立大学図書館協会シンポジウム(東京)(情報サ ビス課)
14	国立七大学図書館協議会・図書館長・事務部課長 会議(札幌)(館長, 部長, 情報管理課長, 情報サー ビス課長, 情報システム課長)	15	図書館年鑑2009北海道ブロック協力者会議(北大) (情報サービス課長)
17	財務マネジメントに関する調査研究事業第3回 合同検討会(東京)(情報管理課, 情報サービス課, 情報システム課)	21	平成20年度第2回学術研究コンテンツ小委員会
17-22	SPARC Digital Repositories Meeting 2008 (アメリカ) (情報システム課)	21	情報探索入門
18	第148回北分館委員会(平成20年度第2回)	22	ライブラリーセミナー(雑誌記事索引・CiNiiの 使い方)
19	北海道図書館連絡会議(第2回)及び北海道図書館大会 運営委員会(第1回)(道立図書館)(情報サービス課長)	28	ライブラリーセミナー(JDreamIIの使い方)
19	ライブラリーセミナー(MEDLINEの使い方)	28	平成20年度第3回図書選定小委員会
20	平成20年度第6回ホームページ委員会	30	図書館見学(釧路湖陵高校7名)
20	情報探索入門	2月	
25	ライブラリーセミナー(MEDLINEの使い方)	3	ライブラリーセミナー(電子ジャーナルの使い方)
26	第10回図書館総合展(横浜)(情報サービス課, 情 報システム課)	4	北海道図書館大会運営委員会(第2回)(道立図書 館)(情報サービス課長)
27	平成20年度国立大学図書館協会北海道地区協会 部課室長会議(北大)	5	ライブラリーセミナー(JDreamIIの使い方)
28	SciFinder Scholar講習会(本館他)	6	平成20年度目録システム/ILLシステム講習会担 当者会議(東京)(情報システム課)
12月		9	DRF地域ワークショップ(東京地区)(東京)(情報 システム課)
1	文献探索ワークショップ(経済学研究科)	10	平成20年度第3回DRF企画委員会(東京)(情報シ ステム課長)
3	北分館図書選定小委員会	10	ライブラリーセミナー(電子ジャーナルの使い方)
3-5	NACSIS-CAT/ILLワークショップ(東京)(情報システム課)	18	機関リポジトリアウトプット評価システムワー クショップ(千葉)(情報システム課)
4	情報探索入門	18	ライブラリーセミナー(新聞記事の探し方)
8-14	北米出張(大学間協定校交流)(情報サービス課, 情報システム課)	18	平成20年度第3回図書館情報システム定例会議
10	国立大学図書館協会臨時理事会(東京)(館長)	20	国立国会図書館レファレンス協同データベース 会議(京都)(情報サービス課)
11-12	DRF/ShaRe地域ワークショップ(山形)(情報システム課)	26	財務マネジメントに関する調査研究事業第4回 合同検討会(東京)(情報管理課, 情報サービス課, 情報システム課)
15-17	財務マネジメント研修出張(鹿児島大学, 香川大学) (情報管理課, 情報サービス課, 情報システム課)	27	国立大学図書館協会学術情報委員会(東京) (館長, 部長)
17	平成20年度第7回ホームページ委員会		
17-19	事務情報化講習会Access中級(情報管理課, 情報サービス課)		

北海道大学附属図書館報「榆蔭」(ゆいゐん) 第131号 平成21年3月31日発行

〈編 集〉 「榆蔭」編集委員会

〈発 行〉 北海道大学附属図書館 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL : 011-706-2967 FAX : 011-706-4109 ホームページ <http://www.lib.hokudai.ac.jp>